

2 学年 校長講演会 まとめ

『社会の変化が見えない今、僕たちは何をすればよいのだろう』

日 時 2017年 4月11日(火)

会 場 花巻北高校第一体育館

はじめに

4月11日に行った講演会で私が話したこと、そして、話したりなかったことを、使用したスライドとともに、ここにまとめておきたいと思います。

次の様なテーマで話しました。

＜本日は話したいこと＞

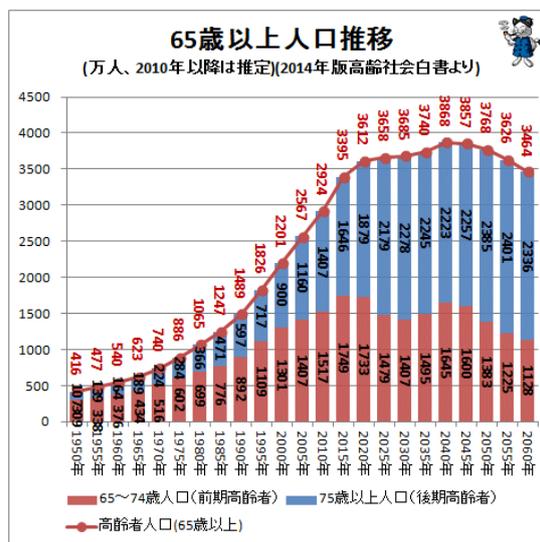
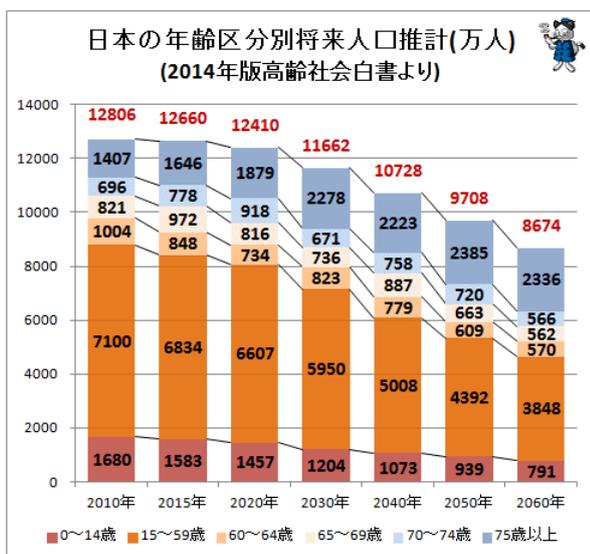
- 私たちの未来はどうなっていくのか
- 働き方はどう変わる？
- 「夢」を持つことについて考える
- 知識ってなんだろう
- 本質的な学びとは
- なぜ勉強をするのか

1 私たちの未来はどうなっていくのか

(1) 日本の人口の推移

4月10日のYahoo ニュースでは、2050年には日本の人口が1億人を切ると述べていました。

ここに、2014年版の高齢社会白書の資料があります。ご覧ください。



人口の減少が激しいですね。年を追うごとに、10年スパンで1000万人もの減少が見られます。一方、日本の人口における65歳以上の人口の占める割合が非常に大きくなっていることもわかります。

(2) 2×××年問題

皆さんは高校2年生ですから、だいたいの方が今年で17歳になりますね。そして今年(2017年)ですから、皆さんはとてもわかりやすい年に生まれていると言えます。つまり、西暦の下2桁が皆さんの年齢になっているわけです。2030年には皆さんは30歳、2060年には60歳ですね。

さて、20××問題といわれるものがあります。それを以下にまとめてみましょう。

【2020年問題】

団塊ジュニア世代社員の高齢化/大学入試の大改革
組織の雇用構造の変化・学校教育の質的变化

この年は、バブル期に大量採用したバブル世代社員が40歳代後半～50歳代前半に達するため、社員の待遇の問題(ポスト不足、人件費負担増など)

が顕著になり、会社組織の雇用構造に大きな変化の波が来るといわれています。

また、2020年度(2021年)からセンター試験が廃止になり、新しい評価テストが導入されます。因みに、現1年生がセンター試験最後の受験生となりますね。これは、単に試験のスタイルが変わるのではなく、「学力」の捉え方、「学び方」に大きな変革のうねりがおきていると認識すべきです。

【2030年問題】

人口の1/3が高齢者(65歳以上)になる
GDP低下・年金見直し・人材不足・ミニ氷河期・医療不足

この年、皆さんは30歳の働き盛りですが、人口の1/3が高齢者になるとされています。生産年齢人口が減少することにもなって、国民総生産が低下していくことが予想されます。

私は60歳で定年退職した後、65歳から年金が支給されます。だから5年間何かをして食いつながないといけません。また、ここにいる先生方は恐らくもっと後、70歳くらいまで年金がでないのではないかと思います。

また、地球温暖化による、「異常気象社会」が到来し、地球温暖化によってミニ氷河期が訪れるという研究報告もあります。

【2040年問題】

人口減少による地域の危機
自治体1800→896が消滅危機523が人口1万人割れ

2040年には、全国1800の自治体のおよそ半数が消滅するという予想があります。

昨年はマルカンの閉店問題が大きくクローズアップされましたが、花巻市は2040年にはどうなるのでしょうか。この年、皆さんは40歳のバリバリの年齢。どこで何をしていますか。

【2060年問題・2100年問題】

国民の2.5人に一人は65歳以上・4人に1人は75歳以上

日本の人口が今の1/3になる(予想)

2060年です。この年、国民の40%が65歳以上、25%が75歳以上となります。そして、2100年には、現在の人口の1/3になるという説もあります。

ここまでの状況を一言でまとめると、どうなるでしょう。高齢化社会？いや、そんなもんじゃありません。超・高齢化社会？いいえ、私は次のように名づけました。

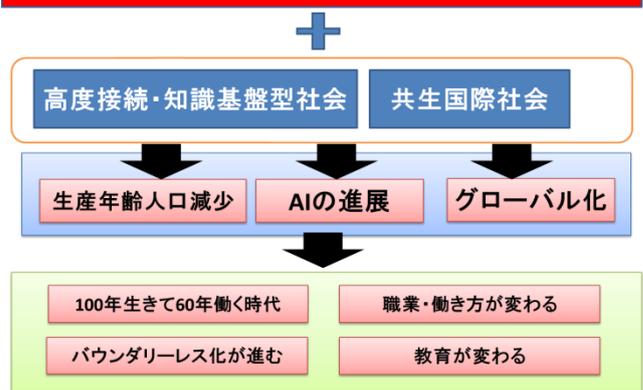
ウルトラ・スーパー・超絶 高齢化社会

未来がこのように進んでいくとき、皆さんの高校生活が、その未来に生きるための前提であるとするならば、今どのような心構えが必要になるのでしょうか。是非、皆さん考えてください。

2 働き方はどう変わる

(1) 高度接続・知識基盤社会と共生国際社会

ウルトラ・スーパー・超絶高齢化社会



このような「ウルトラスーパー超絶高齢化社会」の到来とあわせて、2つの重要な社会変革も記しておきます。

一つは「高度接続社会・知識基盤社会」といわれるものです。これはAI(人工知能)の飛躍的な進展などによって、生み出された新しい知識や価値が、政治・経済・教育・文化等のあらゆる分野で重要性を増していくという社会です。

もう一つは「共生国際社会」と名づけてみました。人、モノ、情報、知識などが国境を超えてつながっていく社会、そして、異なる文化や価値を相互に認め合う共生社会が進んでいくということです。

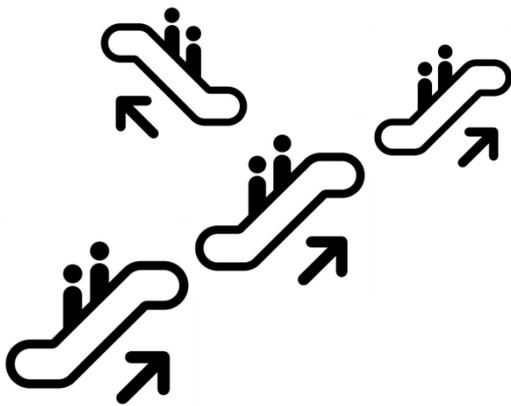
このような社会の変化は、「太平洋戦争」や「産業革命」の時代よりももっと激しいものであるという人もいます。

(2) 2つの特徴的な流れ

こういった社会の枠組みが変わることによって、働き方において次の2つの大きな変化の波を指摘しておきたいと思います。

① 100年生きて60年働く時代がやってくる

医療技術の進歩もあり、ここにいる皆さんは100歳まで生きる人が多いのではないのでしょうか。すると、高齢化・人口減少が進む中で、高齢者だからといって隠居しているわけではありませんね。自分で自分を支えていかなければなりません。60年働くということは、20歳から働き始めれば80歳まで働くということです。



(中原淳氏(東大)の提示された図を参考にした)

そうすると、例えば大学を卒業して、ある会社に就職して、そのままエスカレーターに乗るようにそこで60年間も勤めあげるとはあまり考えられませんね。どこかでエスカレーターを乗り換えるということが起きる可能性が十分あります。あるいは、もしかしたら一度に異なるいくつかのエスカレーターに同時に乗るといったこともあるかもしれません。

② バウンダリーレス化が進む

バウンダリーとは境界線のことです。これからの社会は、様々な境界線がなくなってくると言われています。

例えば働き方については「ICT技術によって時間と空間の境界を超える」「性別や年齢の境界を超える」「組織の内外の境界を超える」「公私の垣根を超える」など。学びで言えば「文系理系の境界を超える」「学校内と学校外の垣根がなくなる」「ネットワーク技術で時空を超える」など、いろいろなことが考えられますね。

3 「夢」を持つことについて考える

では、このような時代の変化の中で、皆さんは働くことについてどのようなビジョンや夢を持っていけばよいのでしょうか。

以前、ある生徒に「あなたの夢は何ですか」と尋ねたら、「岩手県立大学に入ること」と言われてびっくりしたことがあります。私が「なぜ？」と問いかけると、「公務員になるため」という答えが返ってきました。更に「なぜ公務員になりたいの？」と重ねると「安定しているから」とのこと。そして、それ以上の議論には進みませんでした。

実は今、岩手県立大学では、入学してくる学生や親の多くが、大学での専門的な学びのことより、公務員になれるかばかり気にしていて、大学の先生が困惑しているという話を聞いたことがあります。

もう一つ私の周りにあったエピソードを紹介します。某県の某有名進学校に在籍しているA君が後期試験で岩手大学に合格し、3月に盛岡のアパートに引っ越しをしました。私はそこで、合格祝いにと電子レンジをプレゼントしました。ところが、本人の様子がとても暗いのです。そしてそこにいた母親が、ため息交じりに10回以上も言っていたセリフが「前期で東北大学を落ちてしまった」でした。

A君曰く、その高校では先生から「岩手大は墓場だ」とまで言われたそうなんです。そして「東北大に入れなかったから、岩手大に入って先生になるしかない」とこぼしました。おいおい、先生なめんじやねえぞ！と私は突っ込みました(心の中で)。

A君の言動を責めるのは簡単です。でも、彼のそういった思考のクセをつくったのは学校であり親であるのではないかと私は暗澹たる思いがしました。



前頁の図のように、必死に受験勉強して進学校に入り、そしてまた受験勉強して有名大学に合格し、そこで就活して有名企業に就職する。これが幸せな人生のモデルだ、なんていう考えが未だに学校や親の体質になっているのかもしれませんが、そんなものはとっくの昔に崩壊している価値観なのに。



皆さんは、小学校以来、学校生活の中で、こんなふうに言われてきたかもしれません。

「辛くとも勉強を頑張って、先生のいうことを一生懸命聞きなさい。幸福とは努力した先の未来にある。目標を達成した時、幸せになれる。だから、今はつらくても、目標に辿りつくまでは走り続ける」

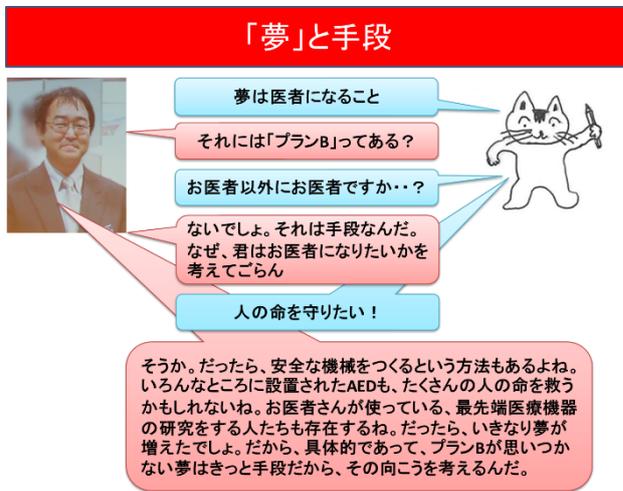
それは、自分に鞭を入れて、嫌なことでも我慢強く頑張る続けるための力になったのかもしれませんが、そのようなガンバリズムの嵐の中で、立ち止まり、なぜを掘り下げたり、自分の頭で考えることができなくなるならば、先ほど話した、100歳まで生きて60年働くキャリアを乗り越えていくことなんかできないと思うのです。

きっと、A君は、東北大学に合格することを「夢」として、ひたすら頑張ってきたのでしょ。そして夢が破れたとき、彼はどうなったか。ただ落ち込むしかなかったとすればそれはとても悲しいことです。

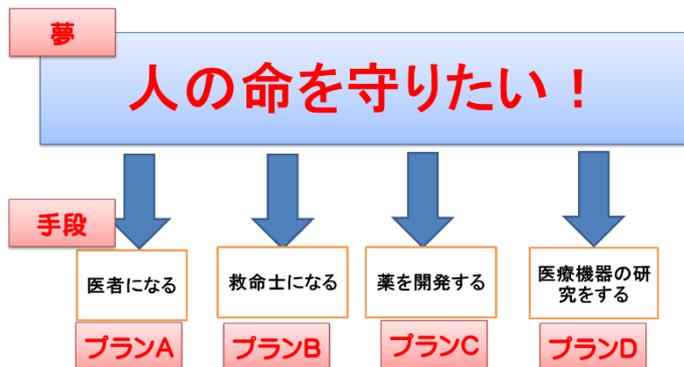
さて、ここで、植松電機専務の植松努氏の「夢と手段」の話がとても興味深いので紹介します。

彼は、思いついた夢に「プランB」があるかどうか考え、プランBを思いつかない夢は、きっと手段であり、その向こう側に本当にやりたいことがある、と述べています。例えば、ある人の夢が「医者にな

りたい」だったとします。すると、「医者になる」ことにプランBはありませんね。つまりこれは手段だったのです。じゃあ、なぜ医者になりたかったのかと掘り下げて聞くと、彼は「人の命を救いたい」と答えるかもしれません。



すると、そこには、「医療機器を開発する」などといった「医者になる」以外にも多くのプランが存在することがわかりますね。



このように考えていくと、自分の志望がかなわなくても、挫折からしなやかに立ち向かえる力になると思います。

進路を決める上で大切なことは、「What」ではなく「Why」で考えていくことではないかと思えます。それが習慣化することで、夢が変化しても、自分の中でぶれない軸(価値観)を持つことや、夢破れても対応できる方向感覚を持つことにつながるのではないかと思います。

これらは、キャリア・アンカー(職業生活における錨のポジション)とキャリア・アダプタビリティ(変化への適応)と呼ばれるものです。

4 大学入試が変わる

では次に、このような世の中の変化に応じて、大学入試はどのように変わっていくのかについて述べておきたいと思います。

大学入試が変わる



図のように、2020 年度からセンター試験に代わるテストとして、大学入学希望者評価テスト(仮称)が導入されます。現在の高校1年生がセンター試験最後の世代ということになりますね。

この試験によって評価されるのは次の3つの学力といわれています。

- ① 教科・科目の十分な知識
- ② 問題を発見・定義し情報を統合、構造化し解決に向けて主体的に思考判断する力
- ③ プロセスや結果を表現する力

このような学力をみるために、テストの問題の内容や出題の形式がこれまでのセンター試験とは大きく変化するでしょう。ただ皆さんは、新しい試験を受験する学年ではありませんね。もしかしてラッキーと思っているでしょうか。

でもね。私たちは往々にして試験の「方法」の変化にばかり目を奪われてしましますが、実は考えなければならぬのは、やはり「なぜ」の視点です。つまり、センター試験がこのような方向に舵をきった理由やその背景について私たちはもっと掘り下げて考えていくべきだと思います。

私は、大学入試改革が起こったのは、社会の変化に対して教育の果たす役割が大きくクローズアップされているからに他ならないと考えています

つまり、これまで、高校での学びが、大学入試が終われば賞味期限切れとなり、大学や社会に出て生きて働くものになっていなかったことの反省に

立って、この改革が起こったと捉えておくべきだと思います。

であるなら、私たちが目指すものは、先ほどあげた①～③の3つの力をみる入試に「対応」することではなく、3つの力を高校生活の中で「身につける」ことこそを目標とすべきではないかと思います。

2020 年度入試から、センター試験世代と、ポストセンター試験世代という、一つの世代の線が引かれます。皆さんは、この線のすれすれのところにいます。年齢的にはたった1～2年のちがいかもしれませんが、ゆくゆくはそこに大きな世代の断絶や絶壁が生まれてくるのかもしれない。

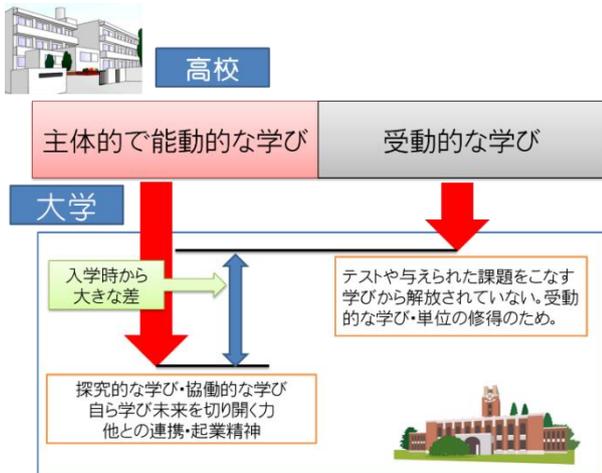
そのような中で、皆さんはセンター試験世代ではありますが、次世代に負けない、未来視点を持ち、自ら道を切り開くパイオニアであって欲しいと思います。センター試験世代の腰の強さと、未来を見据えて変化を受け入れる柔軟な学びの姿勢を持つことの両輪があれば鬼に金棒だと私は思います。

では、どうすれば、そのようなパイオニアになれるのでしょうか。ここで、私は、今年岩手県から唯一京都大学に進んだ卒業生のOさんの話を例に挙げようと思います。Oさんは京都大学教育学部の特色入試を受験しました。この試験はセンター試験の結果だけでなく、高校で何を行ってきたかという「学びの報告書」と、これから大学に入って何を行うかという「学びの設計書」によって評価する入試です。

先日、京都大学のある先生にお会いし聞いたのですが、特色入試で入学した生徒の入学後の伸びは大変目覚ましく、一般入試で入学した学生と比較にならない程であるとのことでした。

その理由は、彼らは「見ている世界が違う」からだといいます。高校のその先を大きくする力とは、自分が高校時代に「何をやったか」という経験の数や、大会で入賞したとかいう実績ではなく、どんな小さなことであっても、何かを体験したそのときに「何を考えてきたか」ということだと思います。そして、実際に具体的な行動としてどんな一歩を踏み出してきたかです。このように自ら考え、行動することが、充実した大学生活につながるのではないかと思います。

Oさんは、マルカンプロジェクトを立ち上げ、大きなムーブメントをもたらす一歩を踏み出しました。また、自由研究では、現在の学校教育に問題意識を持って、フリースクールの研究を行っていました。



京都大学の例だけではなく、高校時代に主体的に学んできた生徒と、与えられた課題をこなす、試験の過去問をただひたすらドリルするというだけでようやく大学に合格した生徒では入学時点ですでに大きなギャップが生まれています。今、多くの大学がそこに気づき始め入試改革を行っています。

大学に入るためにどんな準備をするのか、どんな大学に入るか、就職するためにどんな準備をし、どんな職業につくのか。大事なのはそんなことではなく、今をどう充実させて生きるかということ。そして、その根本は、自分で考え、行動することの楽しさを見つけることではないかと思います。

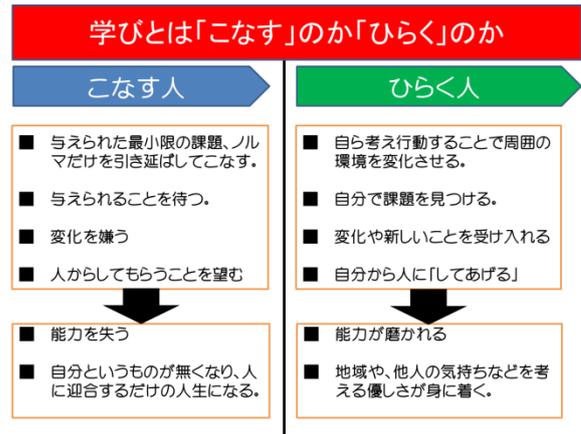
5 「こなす」学びと「拓く」学び

先ほど、夢と手段のところで紹介した植松努氏は、「こなす人」と「ひらく人」の話をよくされます。

「こなす人」とは、与えられた最小限の課題、ノルマをできるだけ引き延ばしてこなす人、与えられるまで待つ人、人からしてもらうことを望む人のことです。一方、「ひらく人」とは、自ら考え行動し、周囲の環境を変化させていく人のことです。変化や新しいことを受け入れ、世の中の理不尽に対して批判的な目を持ち行動していく人のことでもあります。

こなす人は結果として能力を失い、人に迎合するだけの人生につながります。ひらく人は能力が磨かれ、地域や他人の気持ちを考えて行動できる優

しさが身につくと考えられます(図参照)。

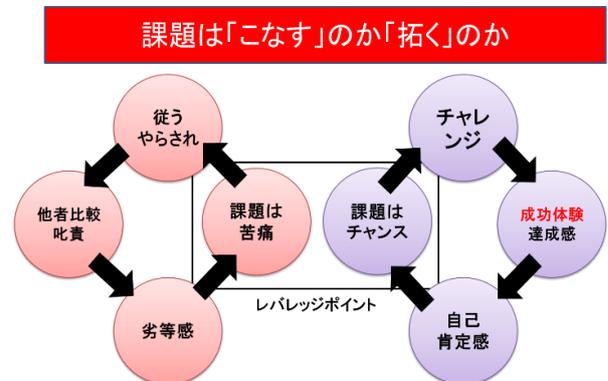


私は、学びについても、「こなす人」と「ひらく人」という見方をしてみたいと思います。

例えば皆さんが日々取り組んでいる課題について考えてみましょう。

課題を「叱られるからしょうがなくやる」といった、「こなす」という意識の人は、課題を苦痛と捉えてしまいます。すると、こなすこと自体が目的化し、与えられること以上のことをやろうとは思わないでしょう。また、他者との比較や先生からの叱責などが自分自身の行動原理になるため、結局自分というものがなくなり、他者に迎合する生き方につながるのではないのでしょうか。これでは苦痛が増し、自己肯定感が薄れる負のサイクルに陥ってしまい、能力が磨かれることはありませんね。

一方、「ひらく人」は、課題を、自らが向上するチャンスと捉えます。チャレンジし、成功体験によって自信を持ち、失敗してもその経験を、自分を高めるきっかけにすることができます。



学びに向かう姿勢は、人生に立ち向かうことと同じです。ですから、課題に対しても、ぜひ、「自分を向上させるチャンス」とポジティブに捉えることを意識して欲しいと思います。

6 知識とは何か

さて、次に「知識」とは何か、そして知識を生み出すサイクルとはどのようなものかについて、特に、昨年読んで感銘を受けた「学びとは何か」(今井むつみ/岩波新書)という本に書いてあることを参考にしながら私見を話していこうと思います。

(1) 知識って何だろう



1分間この図をじっと見て、その後、自分で再現できますか



上の写真は、私とある人が指した将棋の対局の一場面から取り出したものです。皆さんはこれを1分間だけ眺めて、それを盤面に再現できますか。恐らく将棋を経験したことのない人はできないでしょうね。将棋ができる人でも、駒の種類や動かし方を知っている程度では、再現できないと思われます。

でも、今ここにいる、佐野先生ならば恐らくちらっと見ただけで再現できると思います。なぜなら、佐野先生は花巻北高校時代、将棋部で全国3位に輝いた方だからです。佐野先生できますか？

(「できる」との力強いこたえがありました)

では、この図ならどうでしょう。



(これはさすがにできないとのことでした)

そうですね。いくら佐野先生でもこれは再現できませんよね。

最初の図と二番目の図は、盤上にある駒の数は同数です。それなのに、なぜ最初の図は再現可能で、二番目の図は無理なのでしょう。

目の前にある事象を記憶するという点においては、どちらも同じではないかと思う人もいられるかもしれませんが、それなのに、佐野先生はなぜこの図をチラ見ただけで再現できると確信したのでしょうか。

(先生から話を伺う。序盤の定石であることなどの説明がなされた)

佐野先生は、定石といわれました。つまり、数学で言う定理や公式のようなものですね。先生は、その定石を、誰かに教わったり本で学んだりしたかもしれませんが、それだけではないですよ。他者との対局を繰り返すことによって、きっと、生きて働く知識として身についたのではないかと思います。

ちなみに、佐野先生は、次の1手は何だと思えますか？(「先手の飛車先の歩を突く」とのこと)なるほど。さすがですね。この図を見ただけで、次の差し手は先手だとわかったんですね。

ここで、重要なことがわかりました。この局面は、それ自体が唐突に登場したものではなくて、初手からの流れの中で生まれたものだという事です。つまり、時間とともに移りゆく流動的な図と佐野先生は捉えていたわけです。だから、過去や未来の図さえイメージできるんですね。

私は、そこに、知識を生み出していく過程とは何かのヒントがあるように思います。

最初の図には過去から未来に向かうメッセージ、つまりストーリーが隠れているんですね。それに対して二番目の図は何らストーリーを持たない(ストーリーを作り得ない)無意味な情報なんです。

私は「知識」とは、盤面の図という与えられた事実と、その背景にあるストーリーが一体となって頭の中に整理され、進化している状態のことではないかと思います。

意味のない情報を記憶する、あるいは意味を捨て去ってある事象を鵜呑みにするという事であ

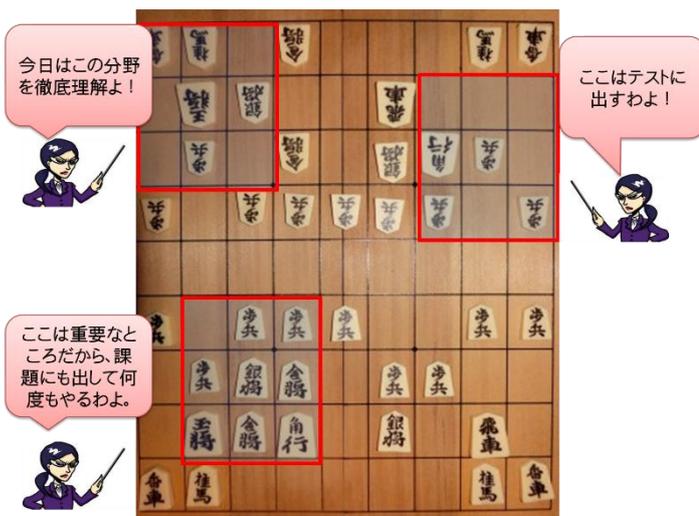
れば、できるだけ余計なことは排除するべきと考えられますね。

例えば「sdjhutnslm」などという無意味材料を記憶する場合は、「情報量はできるだけ少ない方がラク」「ひたすら繰り返し暗唱するだけ」という方向で考えてしまうと思われま。

でも、「しもまっちはシューズとサングラスと時計とパーカーを買った。」という文を覚えるときはどうでしょう。

「しもまっちは『イーハトーブマラソンに出場するために』シューズとサングラスと時計とパーカーを買った。」というような情報を付加し、ストーリー性を持たせた方が、なぜその商品を購入するのかの意味が理解できるので記憶として定着されやすいはずですね。

例えば、ある先生が、最初の図を生徒に覚えさせようとして、次に示すような指導をしたとします。



分解して、徹底して繰り返す。テストに出すよという脅しで覚えさせる。すると、もしかしたら、直近のテストでは再現できるかもしれませんが、でも、それは、テストが終われば忘れてしまい、生きて働くものにはなりませんよね。

今井氏は、このように「知識＝事実」ととらえるような誤った理解を「知識のドゲルケバブモデル」と呼んでいます。ドゲルケバブとは、トルコ料理で、肉片を集めた料理のことです。

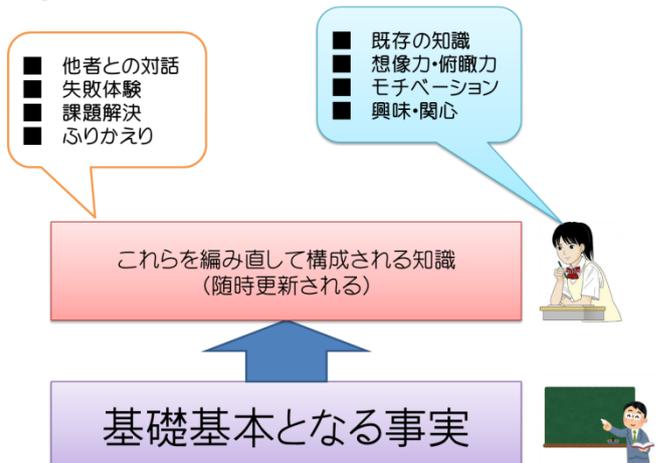
先生から教えられる「事実」を、ドゲルケバブのようにひたすら蓄積していくという知識観ですね。

知識のドネルケバブモデル



我々が勉強しようとしていることは、ねじり鉢巻きをして、根性で「教師から教えられる事実」をひたすら暗記することなのではないでしょうか。そうやって時間をかけてドネルケバブのように、いっぱい頭の中に「事実の集合」を詰め込むことが良い勉強なのではないでしょうか。それが大学合格を勝ち取るための勉強なのではないでしょうか。

これまで話したことを次のスライドでまとめてみます。



知識とは、学校の授業で先生から教えられる「事実」の集合ではなく、それらを得た生徒自身が、これまで自分の中に持っていた事実と融合させ、編み直していく過程であるということです。

つまり、その事実に関わる背景や、事実どうしのつながりなどを含めたストーリーを自分の中に創り上げていくことであり、それが問題を解く力になっていくということです。

知識とは、随時構成され進化し続ける、いわば生命体ともいうべきものなんです。

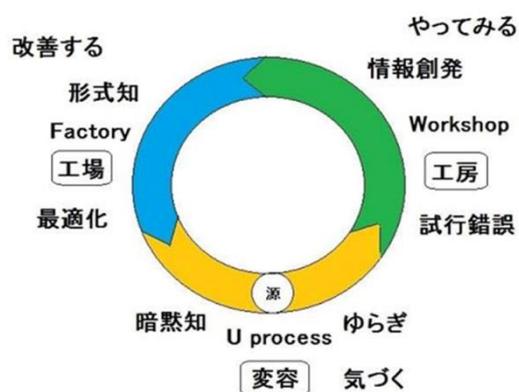
そのように、知識を進化させるためには、教師からの教えをただ受動的に取り入れるのではなく、自

ら課題を設定したり、発信したり、振り返りを行ったりという、主体的で対話的な活動が必要ではないかと思います。そして、そのような活動は、興味関心を抱くこと、自分を俯瞰して見ること、想像力を持つことといった、学びに向かう姿勢によって増幅、促進されていくと私は捉えています。

(2) 知を構成するスパイラル

では、知識がどのような場面で生み出され、高められていくかを考えてみたいと思います。

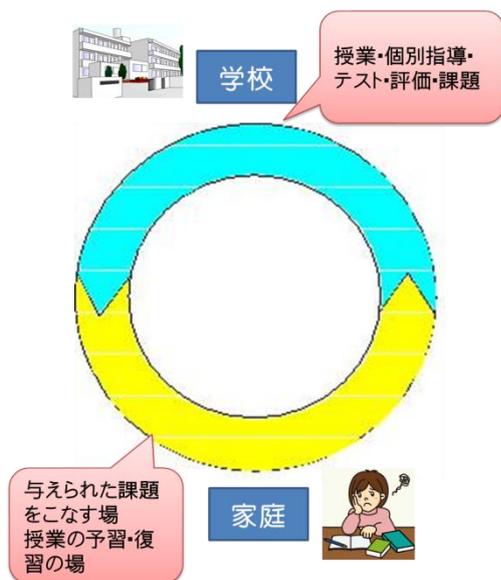
私の WEB 上での友人で、田原真人さんという方がおります。最近彼は次のような、「善悪の評価を超えた野原でまわる共存サイクル」という図を考案されました。



<http://masatotahara.com/?p=2036>

私は、そのアイデアを拝借して、知を構成するスパイラルというものを考えてみました。

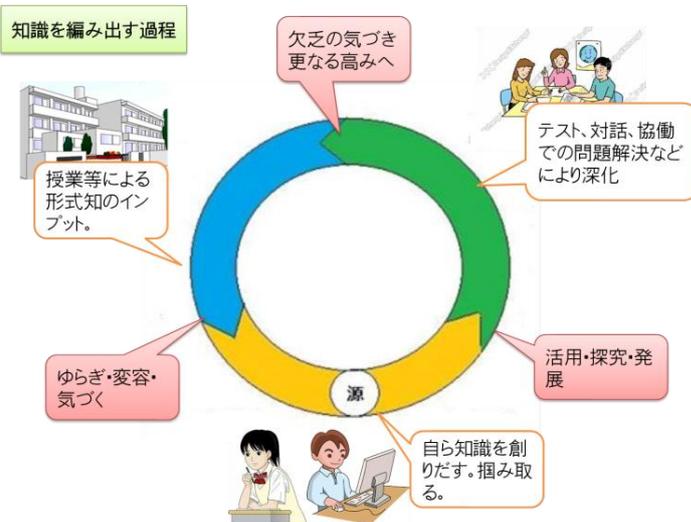
まず、次の図を見てください。



これは、学校と家庭の2つの場によって知識が

作られていくというモデルです。学校で行われる授業や様々な指導によってインストールされた知識を、家庭で復習する、あるいは、家庭で教科書の予習や、与えられた課題プリントなどを行い、学校での授業の理解を進める、という循環です。

一見それはごく普通の勉強の流れのように思えます。でも、学校で真面目に授業を聴く、そして先生から与えられる課題を家庭でせっせと行う、というサイクルによって、自動的に知識は生まれていくものでしょうか。私は、知識がつくられる過程はそんな単純なものではないと思います。



私は、田原さんのモデルを真似て、上のような図で知識が生まれていく過程を考えてみました。

青のベルトは、学校などで行われる講義や、教科書などによって(形式的)知識を得ていく過程です。でも、ここではいくつかの事実が頭に入ったに過ぎず、まだ生きた知識にはなっていません。

大切なのは、青色部分で得た様々な事実によって、自分のなかに「ゆらぎ」が生まれることです。この「ゆらぎ」とは、「そうか!という気づき」や「え!という疑問」、あるいは「なに~!という混乱」などが頭の中に起きている状態です。

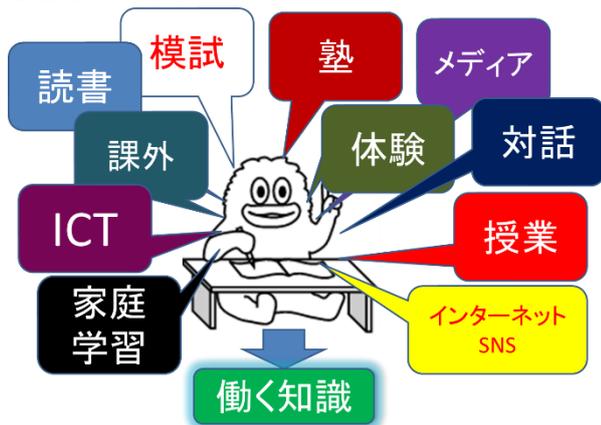
そのような状態の中で、学習者は、与えられた事実を咀嚼し、これまで持っていた知識を動員しながら新たな知識として編み直していくのです。つまり、自らが知を創りだし、掴み取る過程が黄色のベルト部分です。ですから、学びの根本はこの黄色のベルトの部分といってもいいと思います。

このような過程を経て、自分の中で納得が生まれると思いますが、もしかしたら曲解しているかもしれませんし、あるいは、まだ独りよがりの浅い知識であるかもしれません。

そこで、今度はそれをもって、緑のベルトの部分に進みます。ここはアウトプットの領域です。例えば他者との対話や、発信、共同での問題解決などの活動、あるいはテストなどです。これらによって、自分が得た知識が確認され、定着へと進みます。また、活用、発展される深い知へと高めていくことや、逆に、否定や反駁を経て、自らの知識の未熟さや、インプット不足に気づくこともあるでしょう。すると、再び青の矢印に向かって、貪欲に新たな事実をインストールしようと思うわけですね。

こうしたサイクルの中で、生きて働くパワフルな知が構成されていくのではないかと私は考えます。将棋の世界で例えるならば、青色部分が師事している師匠からの教えや書物での研究、黄色部分がそれを咀嚼し自分のものにする過程、そして緑色部分が対局やその後の感想戦、また他者への助言指導などで気づきを生み出す部分と言えます。

これらの3つのサイクルは、学校や家庭という特定の場でそれぞれ行われるのではなく、いたるところで、時に同時並行的にもたらされるのではないかと思います。



このように「メシ食っているときもフロ入っているときも」学んでいる、つまり、生きていくこと自体が知識を構成する活動であると考えれば、家に帰って、机に座っている時間を「家庭学習時間」として調査することが意味のないもののように思えてきますね。

皆さんは、学習時間の量や、与えられたアサインメント(課題)の提出率で、勉強したという安心感を持つべきではありません。それはいわば「こなす」勉強です。

大切なのは、受け取った知識(青色・インプット)を自分事にしていくことです(黄色・インテイク)。それを促すためには、他者との対話や発信など、表現すること(緑色・アウトプット)が大切だと思います。

7 なぜ勉強するか

最近、スポーツマン芸能人として活躍されている、武井壮さんが「勉強する理由」についてツイートしたことが話題になっています。

武井さんのツイートはこれです。

勉強？した方がいいに決まってるだろ！将来役立つかって？勉強したことを無駄にせず役立てるように生きてくんだらうがよ！スポーツに集中したい？舐めんよ！寝てる時間以外16時間練習してんのか！？1日1時間くらい人生を広げる新しい知識手に入れろ！難しいなら人体の研究して競技に役立てろや！ 2017年 Apr 6日 13:46

将来何に役立つかで勉強する、しない、を決めるのではなく、勉強したことを役立てるように生きろ、という言葉にとっても共感します。勉強することが結果として自分の人生を広げていくことなんですね。

このツイート上で、いろんな人が「勉強する理由」について書いていました。以下、その一部を紹介しながら私の話しを終えたいと思います。

英語や数学が出来なくても、将来困るのは君たち自身であり、周りは特に困りませんが、倫理や政治や家庭科を知らないと、君たち自身は何も困りませんが周りがとても迷惑します。

勉強とは受験のためだけに行うものではないということ。勉強する一つの意味は、社会の中で、人と関わり合いながら生きていくためでもあるんですね。

勉強の嫌いな子供の言う「大人になったら人生に三角関数なんか必要ない」は、「三角関数が必要な人生が選べなくなる」が正しい。一度きりの人生ゲームで、その先に何があるのかも知らないまま、そのルートの可能性は閉ざされたのだ。

私は、三角関数の面白さを知っています。人よりたくさん三角関数の勉強をしたからです。もちろん、そのときは、それが何に役に立つかなんて考えていませんでした。また、三角関数を理解したことで、直接お金が儲かったわけではありません。でも、この経験は私の進路を決めてくれました。そして何より、私の人生を豊かにしてくれたように思います。勉強することは、自分のその先の可能性を広げ、未来を切り開くことなんです。

勉強しないと視野が狭くなる。勉強しないと僅かな知識だけでこの世を理解しようとするせいで、ありえない仕組みを仮定して「分からない」を埋め立て始める。分からない物の多さが、分からないからなんでも知っている気分になってしまう。

勉強しない人は傲慢になる。勉強をすればするほど人は謙虚になるんだと思います。

勉強が出来る人は絵を描くことに転向しても勉強ができるからすごく上手くなるのが早い、勉強に対する集中力を絵に置き換えるから、上手くなるのが早い。しかも勉強で培った様々な知識や知性が絵に上乘せされる。

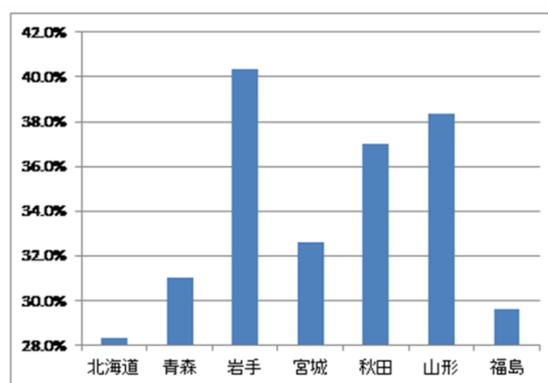
ある教科の勉強をするということは、その教科の知識や技能を獲得するだけではなく、他の分野へも転移されていくということなんです。勉強するということは、「学び方を学ぶ」ということ。それは、人生の中で課題にぶつかったときに対応する力を培っているということだと思います。

社会人になって「学生の間には遊んどけ！社会人になったら遊べなくなるぞ！」ってアドバイスがじつは大嘘だとわかった。金のある社会人の方が学生より絶対に遊べる。学生のうちにやるべきことは腰を据えた勉強や長期旅行などの「長い時間を投入しないとできないこと」だと思う。

「物事には旬がある」といいます。社会に出ても、微分・積分は勉強できるかもしれません。でも、様々なことを、ひたすら貪欲に学べる機会は今はありません。今、皆さんには学ぶ時間が与えられ、学ぶ環境が準備されています。そのカードを切れるのは人生の中で、ただ1回なんです。

「なんで勉強しなきゃいけないの？」って小さい時親に聞いたら「誰が本当のことを言っていて、誰が嘘つきなのかわかるようになるため。それがわかれば世界が楽しくなるし、あなた自身の心が豊かになるのよ」って言われたけど、10代の私にこれをさらっと言ううちの親すごいなっていまさら思う。

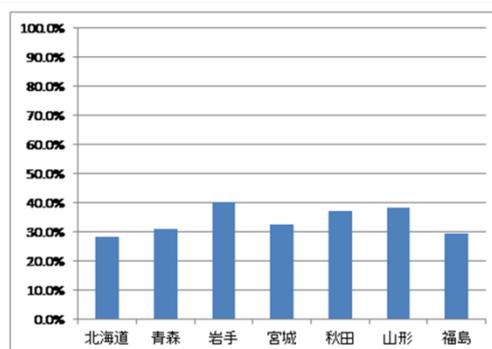
センター試験の受験率(県内高校生比)



上の図は、以前私が作った、北海道と東北6県の高校3年生におけるセンター試験の受験率を表したグラフです。岩手はセンター試験の得点が低いということがいわれているので、このグラフを作り、「だってこんなに受験率が高いんだからしょうがないでしょ」と説明しました。私の話を聞いた人は「なるほど、そうなんだ」と納得してくれました。

でもね。実はこれは欺瞞だったんです。

グラフをよく見てください。これはいわゆる「足切りグラフ」とわれるものです。本当は次のようになるのです。



どうでしょう。これだと、各都道府県における有意差を感じませんね。有意差があるのかないのかをきちんと検証するには、検定という数学的な統計処理を行う必要があります。私たちは、このような数字のマジックや、人を欺くロジックにひっかからないためにも、日々勉強する必要がありますね。

もう一つ例をあげます。ある有名なベストセラーの書物に、「ピラミッドの不思議」としてこんなことが書かれていました。「(ピラミッドの)地上から頂上までの高さ 146.7m と、地上における建造物周辺の長さ 921.44mの比率は、円の半径と円周の比率 2π となる。このような数学的に精密な相互関係が偶然生まれるとはとても思えない。したがって大ピラミッドの建設者たちは π について大変詳しく、意識的にこの数値を建造物の寸法に使用したに違いない。」

あなたはこれを信じますか。

古代人は、コロと呼ばれる計測輪で、距離を測っていたといわれています。



例えば、直径が Lm の計測輪で10回転するように周を決めれば、その長さは $10\pi Lm$ です。

でも、積み上げる高さはコロでは測れません。そこで、例えば、高さ L のレンガを10個積み上げるなどとするわけです。すると、当然、両者の比をとると π の値が現れるわけです。

私たちが学ぶことの意義は、「なぜ」を掘り下げ、物事を批判的に観る力を養うということもあると思います。

8 まとめ

これまで話したことをふり返ってみましょう。

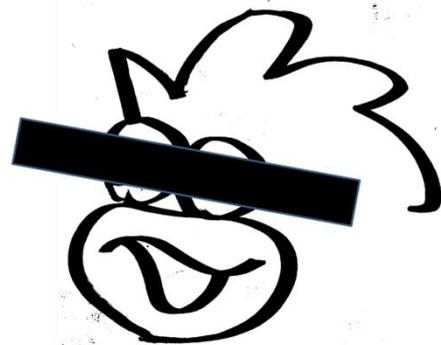
- 私たちの未来はどうなっていくのか
- 働き方はどう変わる？
- 「夢」と「手段」の違いとは
- 知識ってなんだろう
- 本質的な学びとは(「こなす」と「ひらく」)
- なぜ勉強をするのか

こんなことを話しました。ペアになってどんな内容だったか確認して欲しかったのですが、時間がなくなっていました。

私の思いは、皆さんに主体的に学び続ける人間(アクティブラーナー)になって欲しいということです。オマケとして、アクティブラーナーになるための魔法の言葉を紹介しますね。

切羽詰まったとき、困難な課題にぶつかったとき、傷ついたり、憂鬱な気持ちになったときに、こんな言葉をつぶやいてみてください。

「やり遂げ、乗り越えている未来の自分が見える」
「だったらどうすればいいのか考えよう！」
「俺は(私は)No Limit！」



16歳 K・Y 君

僕は、自分に自信が持てなくて、いつも不満やもんくを言っていたり、「どうせ俺は」とつぶやくことが多かったです。そんなとき、「魔法の言葉」に出会って、騙されたと思って、使い続けたら、何と3ヶ月で、身体も心もすっきり。成績も向上し、新しい友達もできました。何より自分に自信を持つことができたと思います。

では、最後に一つの問を皆さんに投げかけて終わりたいと思います。

それはこれです。

自分の人生と、日本の未来をきりひらくという視点に立ったとき、あなたは、この1年間どのように学びに向かおうと思いますか。

これは答えのない問いです。一人一人その答は違うでしょう。でも、皆さんには、これからの高校生活の中で、この問いに向き合い、そして、自ら新たな問いを立てながら、前向きに学びに向かっていて欲しいと思います。

ご静聴ありがとうございました。

(下町壽男/しもまち ひさお)